



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間訂共1100円



第一回アジア宣教大会閉幕

アジアにおけるイエスの物語を分かち合う

十月十八日(二十一日まで、チェンマイ(タイ)で開かれた「第一回アジア宣教大会」には世界中から千人以上が出席、「アジアにおけるイエスの物語」をテーマに参加者による信仰体験の分かち合いと交流があった。日本からは菊地功新瀧司教を団長に司教三人、五人の司祭・修道者と信徒十三人が参加した。鹿兒島教区からは長崎教会管区を代表して郡山健次郎司教と岩崎正幸さん(谷山・ラサール学園教諭)が集いに参加した。教区報では、岩崎さんの大会後の感想を紹介する。

大会に参加して

谷山教会 岩崎正幸

このたび第一回アジア宣教大会に参加する機会を得ましたので、その時の簡単な報告をさせて頂き、この貴重な経験を皆様とも分かち合いたいと思います。

チェンマイ国際空港に着いてからホテルへのバスの中で一緒になったインドネシア代表団の方々の意気込みには感心しました。国旗からのデザインと思われ、スカートを身につけ、バスが発車するや「サルベレジナ」の大合唱、人数もさることながら、準備万端やっていたという印象でした。大会中も、講演の合間に行われるアニメーション(休憩中の軽いゲームや音楽)を担当されるなど、宣教派遣事業に直接かかわっている信徒の方々が多く参

加されていたようで、慣れている感じがしました。大会は木曜日から土曜日まで、おおよそ朝はミサ、朝食後は講演、午後から小さなグループに分かれての分かち合い、夜は日ごとの特別なプログラムという構成で、朝六時から夜十時までスケジュールはびっしり詰まっています。夜の日ごとのプログラムは毎日素晴らしいものが続きました。木曜日はタイのカトリック学校の生徒たちによるミュージカル、金曜日はロザリオの祈りと聖体行列、土曜日は大パーティー。そのなかでも特に印象に残っているのは、金曜日の祈りの集いでした。祈りは言葉があまり分からなくても何を祈っているのか

その生き方を手本とし日々殉教を 川内殉教祭でレオに誓う



さえ分かれれば気持ちは一つになれると感じたからかもしれません。この大会を通じて感じたことは、「日本は本当にアジアの片隅なのであるな」ということ。中国本土からの参加がなかったです。しかし、小さなグループに分か

たこととは、「日本は本当にアジアの片隅なのであるな」ということ。中国本土からの参加がなかったです。しかし、小さなグループに分か

「来年は福者へ」の期待に胸を膨らませた信者たちが大勢集まり、十一月十九日(日)午後、川内教会でレオ税所七右衛門敦朝の殉教を記念し、その列福を祈る「川内殉教祭」が開かれた。【写真は京泊教会跡地】

毎日、教区を代表してその列福のための祈り(レオ七右衛門の列福を求める祈り)をささげている川内教会信者たちの願いが実現間近となった今年の「川内殉教祭」には、これまで最高の三百人余の信徒と二十

人を超える司祭が駆けつけた。その中には、徳之島、奄美からの信徒と司祭の姿があったほか、長崎や鎌倉など遠方からの参加者たちの姿も見られた。一九八五年から続けられている同殉教祭、今年も例年通り殉教者レオ七右衛門についての講演会とミサ、またレオが受洗し、殉教後一時その遺体が埋葬されたドミニコ会の京泊教会跡地への巡礼が行われた。

今年講演を担当したのは、キリシタン史が専門の片岡瑠美子修道女(純心聖母会・長崎純心大学教授)。講師は、レオにかかわりの深かった宣教師たちの記録をもとに、レオの教会との出会いからその殉教に至る彼の人間関係を含む生き方を「キリストに心奪われた生き方」と表現し、熱く語った。講師から示されたレオの生き方に、教会との一致の中にあつたこと、ロザ

ブラジルへ出発 郡山康子修道女

元氣印の修道女が、それを証明するかのよう新しい使命に燃えて十一月初旬、異国へと旅立った。長崎純心聖母会鹿兒島修道院の郡山康子修道女(六十六歳、奄美大島は瀬留の出身で、現教区長の令姉である。彼女が向かった先は、日本の裏側、南米ブラジル。そのブラジル南部パラナ州クリチバという町に向かったのだ。病に伏したお母さんを看取るという大役を果たし、この海外での奉仕に目覚めたいらしい。以前、悩んでいたときに「なぐんにも心配しなさんな。神さまは欲しい」と



思えば、お望みの人をバスに轆かせ、怪我させてでも自分のものになさる」と強引な指導をくれた。よくよく聞く「シスターの召命に関する重大な事件だった。あつげらかんとしたこの一人の修道女が、異国でまた多くの人を励ましてくれることを願ってやまない。

ある小学校の同窓会がきっかけで、今は教区本部敷地内にモニュメントとして記録されている「ザビエル幼稚園」の卒園生たち数人が、居酒屋に集合した▼学校の違った者にとつては四十数年前にそこを旅立って以来、会ったこともなかった人たちがかりだつたから、お決まりの挨拶「久しぶり」という言葉は何となくピンと来なかった。それでも、人のよさそうなおじさんとおばさんばかりだつたから、終始心和む会となつた▼酒を酌み交わしながらの交流の話題は、当時の恩師、今は亡き坂上先生のお祈りの時に合わせる手がきれいだったこと。十人程の集いの中に信者は二人、でもなぜかみんながそのお祈り時の姿を記憶していた。先生のことを「教会横にあつたルルドのマリア様みたいだった」とも、「なぜ廃園に?」「なぜ壊したの?」と四十年以上の時の流れは忘れて、皆が当時の教会と幼稚園を懐かしがり、幼稚園が、教会が心の故郷であると断言切つた▼そして孝二郎君が歌を歌い出した。すると自然と全員がそれに続いた。彼らはそれが聖歌だなんて、ラテン語の歌だなんて知らずにいた。彼らの口から流れ出したのは「アデステ、フィデーレス」(来たれ信徒よ)だつた。そういえば七田和二郎神父からクリスマス前の聖劇のために何度も教えられた歌だつた。

YET!

ある小学校の同窓会がきっかけで、今は教区本部敷地内にモニュメントとして記録されている「ザビエル幼稚園」の卒園生たち数人が、居酒屋に集合した▼学校の違った者にとつては四十数年前にそこを旅立って以来、会ったこともなかった人たちがかりだつたから、お決まりの挨拶「久しぶり」という言葉は何となくピンと来なかった。それでも、人のよさそうなおじさんとおばさんばかりだつたから、終始心和む会となつた▼酒を酌み交わしながらの交流の話題は、当時の恩師、今は亡き坂上先生のお祈りの時に合わせる手がきれいだったこと。十人程の集いの中に信者は二人、でもなぜかみんながそのお祈り時の姿を記憶していた。先生のことを「教会横にあつたルルドのマリア様みたいだった」とも、「なぜ廃園に?」「なぜ壊したの?」と四十年以上の時の流れは忘れて、皆が当時の教会と幼稚園を懐かしがり、幼稚園が、教会が心の故郷であると断言切つた▼そして孝二郎君が歌を歌い出した。すると自然と全員がそれに続いた。彼らはそれが聖歌だなんて、ラテン語の歌だなんて知らずにいた。彼らの口から流れ出したのは「アデステ、フィデーレス」(来たれ信徒よ)だつた。そういえば七田和二郎神父からクリスマス前の聖劇のために何度も教えられた歌だつた。



レオの殉教の次第を紙芝居に 純心聖母会のSr.山頭信子



死刑執行人が刀を抜いたとき、レオは「まだ時間ではござらぬ。落ち着きなされ。ゆつくり祈らせて頂きたい」と言った。それから30分位祈った。その後ふところから受難のご絵を取り出し、うやうやしく拝んで懐に納め、ロザリオは手に巻いた。執行人はこれを見て、「もうでござるか」レオは「もうでござるか」と答えると頭を下げ、首をよ

く伸ばし、前に出し、執行人はレオに刀をかけた。洗礼を受けて一八日目のことだった。

これは昨年十一月に完成したレオ祝所七右衛門朝の殉教を物語にした紙芝居「もうでござるか」さつ「最初の殉教者」の一場面である。制作したのは長崎純心聖母会鹿兒島修道院のシスター山頭信子。十

か月の月日を費やして、教会学校の生徒たちの協力ももらいながら、絵と脚本作りに汗した実りである。シスターがこれまでに手掛けた紙芝居は十作。その中には「ナバラ王国の貴

公子」、また平戸に伝わる隠れキリシタンの物語「おろくにんさま」などがある。どれもシスターが一枚ずつ心血注いで仕上げた絵と美しい文章でできている。

「もうでござるか」は、教会学校の子ども達が「鹿兒島出身の聖人がいるのか」という疑問を投げかける場面から始まり、その子

ども達が、シスターと一緒に聖人や福者の意味を調べ、また岡本哲男神父(ドミニコ会)に会いに行つてレオの壮絶な殉教に至る次第を学ぶという設定になっている。

数年前からザビエル教会の教会学校を手伝っているシスター山頭、このレオの紙芝居の脚本に手を加え、子ども達と劇を上演したいと張り切っている。子ども達に伝えるべきことをしっかりと伝えたいというシスターの愛と熱気が漂う作品である。

「ザビエルの拓いた道」を学ぶ

鹿兒島純心女子大学でシンポジウム



十一月四日(土)午後一時半から四時半まで、鹿

児島純心女子大学で「ザビエルの拓いた道」をテーマにシンポジウムが行われた。

これは、聖フランシスコ・ザビエル生誕五百年を記念して開かれたもので、シンポジウムとして岸野久氏(キリスト教史学会理事)、シスター片岡瑠美子(長崎純心大学教授)、川村信三神父(上智大学助教授)の三氏が登壇した。

岸野氏は「ザビエルによる知的レベルでの日本発見」と題し、ザビエルはインドやモルッカ諸国での体験を踏まえて、日本人の知性を高く評価したこと。また、日本と日本人についてのザビエルの報告が当時の西洋人に多大な影響を及ぼした事実を分かり易く説明した。

シスター片岡は「ザビエルの後継者アレキサンドロ・ヴァリニャーノの教育事業(セミナリオ・コレジオ)を中心に」と題して、ザビエルの時代の信仰の種が具体的に日本人司祭養成という形で実を結んでいった経緯を詳しく説明した。

川村神父は「ザビエルの体験した葛藤と学び」と題し次のように語った。「当時の植民地主義的世界制覇を目指すポルトガル人やスペイン人のこの世代的価値観からすれば、ザビエルのアジア宣教は失敗に終わったといえる。しかし、彼は福音の使者として、社会の底辺で暮らす人々をより大事にした。インドでもそうであったし、日本でも府内で日本初の病院を建てている。「ミゼリコルディ

ア」と呼ばれる信徒の組織をつくり、少ない司祭数でも信徒と協力して教会を発展させた業績は今日でも学ぶべき点として評価されるべきである。」

司教執務 宣便り

十九日川内殉教祭・二十一日神学院祭・二十三日シドゥチ祭。一日おきに三つの祭をハシゴしたことになる。

中でもシドゥチ祭は心に残るものだった。参加者十五人。司祭四人。しかも、恒例の町主催の式典も雨のため中止。まさにひっそり。それだけに、一七〇八年十月十一日、

単身変装しての屋久島上陸と直後の捕縛と江戸送り。そして、座敷牢。ついに地下牢での餓死刑。そんな師の孤独が一層偲ばれた。

そんな師の功績?を思う時、ザビエルの鹿兒島上陸とその後の業績にも匹敵する偉業と言えるのではないか。そんな宣教師を顕彰するシドゥチ祭をこのまま「放置」してはいけない。

「人口二万四千人の世界遺産の島に再び宣教師を送りたい!」

小さな聖堂で座っている



「人口二万四千人の世界遺産の島に再び宣教師を送りたい!」

小さな聖堂で座っている

小さな聖堂で座っている

小さな聖堂で座っている

小さな聖堂で座っている

小さな聖堂で座っている

小さな聖堂で座っている

小さな聖堂で座っている

新風 ある托鉢僧の話

鹿兒島市の繁華街にある、有名デパートの前で、毎日、お坊さんが日替わりで、托鉢をしています。その中の一人と懇意な間柄になり、月一回、教区本部の会議室で、禅とキリスト教の対話集会「月光の会」を開いています。このお坊さんによると、デパート前での托鉢は十数年前から始めており、今日ではすっかり風物のようになっているそうです。彼はアーケード内の十字路の中央に仁王立ちになり一秒間隔で鈴をチーンと鳴らします。一定の間隔で響く澄み切った鈴の音が雑踏の中で際立って聞こえてきます。その音色に人々は心が安らぐ、と言ってくれるそうです。この鈴の音の間隔は自分の呼吸に合わせたもので、最初はそうでなかったそうです。托鉢を始め

た当初は、修行僧がここにいるぞ、ということを知らしめるために大きく、しかも連続して鳴らしていたそうです。ところがある日一人の老婦人から「ヤカマシカー(うるさい)」と注意されたそうです。そこで彼は自分が目立とうという自己顕示欲を改め、座禅の呼吸法に沿って、鳴らし始めました。それ以来その音色はやさしく、しかもさりげなく響き、人々の心を癒し続けているのだそうです。キリスト教徒の私はその音色に実際に触れ、「はくいき、すういきの内に父はいる」(典礼聖歌「父はいる」)を思い出すと同時に、13世紀(十字軍を聖地へ派遣していた頃)に教会を福音の精神で建て直したアシジの聖フランシスコのことに思いを馳せました。そういえば、彼も教会の中で托鉢修道会を始めた人だったのだ、と。(N. H)

これからも地域とともに

加世田と枕崎教会が献堂五十年を祝う

十一月十二日(日)加世田教会で「加世田・枕崎教会献堂五十年」のミサと祝賀会が行われ、教区内各地から四百五十人余りの信徒が集った。記念ミサでは聖堂に入りきれない信者が大勢出るほどで、教会の基礎を築いた先達たちへの感謝の心があふれていた。



喜び一杯の信者たちが集まった

一九五六年、レデンブートル会宣教師たちの尽力で加世田教会は四月に、枕崎教会は八月に献堂された。どちらももごんまりとしていて温かみと落ち着きを感じさせる教会。司祭・修道者への召命も豊富で、これまでに成相明人神父(鹿兒島教区・引

退) Sr.上村時子(聖パウロ女子修道会)、Sr.松元陸(聖血礼拝修道女会)、Sr.今給黎久美子、Sr.黒田朝子(宮崎カリタス修道女会)、Sr.安藤克子(レデンブートル宣教師女会)、Sr.杉本ミチ(故人・お告げのフランシスコ姉妹会)らが出ている。

ミサで説教した郡山司教は、「この五十年の歩みは、ありのままの自分を神にささげ使ってもらった歩みだった。これからの歩みも同様に自分らしさを失わずに活かし合ってほしい」と信者たちを励ました。

ミサ後の祝賀会で祝辞を述べた頭島光神父(レデンブートル会)からは、絶えざる御助けの聖母の御絵

あら まあ 見つけました 第55回おはら祭で

11月3日(金)おはら祭の踊連の中に、中野、ティエン、アンの3人の司祭とシスター1人、そして加世田の信者さんの姿を発見しました。



きぼうの電話が 認定修了式

六月から開講された第十九回鹿兒島きぼうの電話養成講座の認定・修了式が十一月十七日(金)夜、教区本部であった。

今回の講座を受講したのは四十八人。そのうち十三人が規定回数以上の講座を受講し終え、この日、十七人が電話を取る相談員として認定され、十六人が修了者となった。今回誕生した新相談員の内訳はカトリックが九人、プロテスタントが一人、仏教徒二人、無宗教が五人であった。

短信

▼女性信徒の会

十月二十五日(水)人吉教会とその近隣のお寺を巡る遠足を行った。七十人参加。一行は石水寺や西郷ゆかりの永国寺などで同行のムイベルガ神父から多くのことを学んだ。

▼CLC九州大会

十一月三日(金)〜四日(土)、CLCの九州大会が「ザビエルが伝えたもの」の私たちが伝えるもの」をテーマに吹上町で開かれた。また四日にはザビエル教会で派遣ミサをささげた。

▼ザビエル講演会

十一月四日(土)九州ソフィア会主催の聖フランシスコ・ザビエル生誕五百年を記念した講演会が県民交流センターで開かれた。

12月 今月の暦

3日(日) 待降節第一主日
宣教師司祭育成の日(献金)

日本にはこれまで海外から多くの宣教師が来て、キリスト教の信仰をもたらしてくれました。現在の信徒数に対して司祭の数は確かに多いでしょう。でも、キリストを知らない人の数を考えると、もっともっと司祭が必要で、(宣教師を含めて)約八万人に一人の割合です。

「宣教師司祭育成の日」は、日本だけでなく世界中の宣教師において司祭の育成が大切なことに気づき、そのために祈り、献金をささげるよう呼びかけます。この日の献金はローマ教皇庁に集められ、全世界の宣教師の司祭育成のために援助金として送られます。

▼小川靖忠神父叙階記念日(一九七二年)

▼中野裕明神父霊名(ザビエル)

8日(金) 無原罪のマリア

10日(日) 待降節第二主日

▼鹿兒島市民クリスマス・カテドラル・14時

17日(日) 待降節第三主日

20日(水) 大野和夫神父叙階記念日(一九六一年)

24日(日) 待降節第四主日

25日(月) 主の降誕

26日(火) 聖ステファノ殉教者

27日(水) 聖ヨハネ使徒福音記者

▼田邊 徹神父、寝占教之神父、末吉卓也神父 霊名

28日(木) 幼子殉教者

31日(日) 聖歌家族

鹿兒島市民クリスマス

テーマ「愛」をテーマにした人になるために
日時 12月10日(日) 14時〜16時
場所 鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂
講演 小川靖忠神父(フランシスコ会)
音楽 フォンテーヌ・メロディ
入場料 二千円(小学生以下無料)

アドヴェントコンサート

12月6日(水) 19時(18時30分会場)
鹿兒島カテドラル・ザビエル教会
入場料 二千円(全席自由)
主催 鹿兒島ハイドン協会

門田 明氏の 鹿兒島とキリスト教⑧ 日本へ、日本へ

先号では、ザビエルがひたすら日本に心をひかれ、「大暴風、たくさん浅瀬、無数の海賊の危険があり、とくに暴風雨のために三隻のうち二隻が到着すれば、大成功とされている」大変な航海に乗り出そうと決心したことを紹介した。

その同じ手紙で、出発の日取りを「二五四年の洗礼者聖ヨハネの祝日(六月二十四日)の昼か夕方に、出航する予定です」といつている。その予定のとおり、この六月二十四日の午後、アバンというシナ商人の船で

マラッカを出航したのである。この予定と実行の状況から、私は、ザビエルが宗教だけでなく実務能力にも優れた人物であったという印象を受ける。

さて、日本への航海は実に危険なものであった。少し長い書簡をそのまま引用したい。

マラッカを出たザビエルの船は「ゆるやかな船足でシナに向かい、コイチシナの海岸に沿ってゆっくり航海してました。シナのすぐ近くまで来た時、聖マリア・マグダレナの祝日(七月二十一日)の夕暮れ、一日のうち二つの惨事が起こりました。波が高くなり、しげ模様となつてきましたので船を停泊させていました。その時どうしたわけか船のハッチが開いたままになっていて、私

たちの仲間、シナ人のマヌエルがそこを通った時、大波で船が大きく揺れたため、立っていられなくなってハッチの中に落ちてしまったのです。ひどい落ち方で重傷を負うが、マヌエルは健康を回復したようである。この箇所、直訳では「船のポンプが開けたままで」と書かれていると河野訳は注記している。山田尚二「キリスト教伝来と鹿兒島」(95頁)でも、「木造船のアカ取りのための細いポンプ穴だろう」と説明し、ハッチのかわりにすべて「ポンプ穴」としている。

いまひとつの悲劇は、船が大揺れに揺れたために船長の娘が海に落ち、人々の目の前で溺死したことである。なんとも悲痛な航海であった。(玉里 教会信徒・ザビエル上陸顕彰会会長)

奄美大島巡礼の旅に参加して

ザビエル教会 古城敦子

私にとって初めての巡礼の旅(十月十六日~十八日)、奄美大島も初めてでした。懐かしい笑顔で迎え

て下さった末吉神父様、皆が胸弾ませた瞬間でした。古仁屋港から加計呂麻島へ。どこまでも続くコ

ルサーピスが始まりです。左遠方にキラキラと古仁屋の灯が見えます。波の音と満天の星空の下、ローソクの灯の下で歌

った聖歌、神父様と十七人全員の心がすべて一つになった感銘のひと時、一生忘れないでしょう。

二日目、名瀬市、龍郷町へと教会巡礼、車のない時代、ハブの生息するこの地で馬や徒歩で宣教活動なさった神父様、宣教師の方々の大変なご苦労を肌で実感、頭が下がります。

バスは走り、次々に現れる集落、それぞれの中に静かにたたずむ小さな教会、聖堂に入り、きれいに清掃された畳、椅子、そこに手を触れるとき、いつもそこに座って祈って折られるであろう信者さんたちの息遣いを感じます。共に祈る。神はここに祈られる。言葉が実感となり、深い祈りと神様の愛を心から感じた時でした。瀬留の教会で、ミサと交流会、たくさんさんの教会の方々の心温まるおもてなしに感謝の念でいっぱいです。

神様の与えて下さる愛、自然の与えて下さる愛、人々の心の愛、すべての愛の豊かな恵みを感じたい。ただいた感動の旅でした。三日間、共に過ごさずすべてを与えて下さった末吉神父様、今日も夕陽の沈むあの美しい海岸を走っていらっしやるのでしようか。空港で飛び立つ瞬間まで大きく手を振り見送って下さったお姿、私たちの胸に深く刻み込まれております。心からありがとうございます。そして感謝……



美しさに感嘆の声……。一回目のミサは広く白い砂浜の上に立つテラスの上で、寄せては返す波の音の中でミサが始まります。大自然の与えて下さる大きな恵の中に、神父様の祈りの声が「主は水辺に立った」の聖歌と重なった賛美と感動のミサでした。

夕食後キャンド

卒業生涙の谷をロザリオに

ドイツのアーヘン教区で、老齢司祭年金制度が一九七五年に始まりました。「ミッシオ」と呼ばれる福音宣教活動のすべての面を経済的に支えるこの組織のなかで、老齢司祭の生活を支えるいわゆる年金基金を

集めるための制度です。数年後の活動は福音宣教省管轄下に入り、この制度の恩恵を宣教地の司祭が受けることができるようになりました。当然、鹿児島教区司祭もその恩恵を受けるようになりました。その仕組みは次のようなものです。

「ミッシオ」からもう一年金受給年齢(六十五歳)未満の司祭は毎月、二回、ミッシオの会員のためにミサを捧げるといふものがあります。つまりそのミサ謝礼が年金基金に加算されるといふわけです。

アーヘン教区で始まったこの活動にどれぐらいの人々が参加して下さっているのか分かりませんが、ミサ奉納金を通して司祭の生活を支えて下さっているわけです。「ミッシオ」の精神はキリストこそ新しい世界を創造なさる方であることを確信して福音宣教に邁進している人々を支えることにある。それはキリストの要請であるし、信仰の証し、命の分かち合い、連帯精神の実践である、とそ

文芸

俳句 (思川俳句会作品)

純心学園 川上 和
舞台踏みしやもじも踊る田のかんさあ
(評) 舞台は棚田の特設であっても「しやもじが踊る」程、人の心を豊かにする佳句

出水 遠竹陸郎

七十の同窓会や里の秋

鹿児島 徳永ノブ子

農夫愛残せし落穂鳥つつく

出水 沖 弘子

診察を待つ間の祈り秋桜花

阿久根 中津濱フサエ

すず虫のさわやかなりし秋の月

鹿児島 春山マリ子

秋の陽に包まれ犬と戯れる

鹿児島 本城 愛

立冬や影絵もゆるる鉢の竹

純心学園 山頭信子

短歌 (思川短歌会作品)

鹿見島 龍門司真人
ミサ告げる鐘にいそしむ去年今年

奄美 林 常広

年老いし人をささえて生きましよう

若いあなたの手のぬくもりで

禁煙を医師に言われてやめられぬ

キリスト・マリア・助けてたまえ

(評) 作者の「手のぬくもり」を感じさせる結句が祈りを表した句

阿久根 中津濱フサエ

病む毎にやさしき夫の愛うけて生き

ゆく恵み日々尊はん

鹿児島 春山マリ子

悲しみが空一杯に広がりぬ私の胸を

責め打つように

薩摩なるおはら祭の賑やかに街練り

歩く菊薫る日に

鹿児島 前田儀子

離れ住む娘の生活思ひつつガラス戸

たたく風音聞きぬ

明光学園 森 博伸

化野の首なしほとけ尼寺よほとけも

人も泣きし嵯峨野よ

奄美 林 明子

ないた夜おたがいなぐさめあうい

エスさま二人を愛してくれますか

阿久根 窪田ヒサエ

花盛り働き盛りすぎこして日々祈

らん感謝のうちに

純心学園 川上 和

ながさきのオランダ館よみがえる三

百余年の出島ともして

阿久根 眞清水 藍

並びて王者の位競う如公孫樹並木

は黄金の道

鹿児島 田平新太郎

海鳴りをともなふ夜の引く波は島の入江

に隠れん坊しぬ

シリーズ「教区財政を考える」②

老齢司祭年金制度について

集めるための制度です。数年後の活動は福音宣教省管轄下に入り、この制度の恩恵を宣教地の司祭が受けることができるようになりました。当然、鹿児島教区司祭もその恩恵を受けるようになりました。その仕組みは次のようなものです。

「ミッシオ」からもう一年金受給年齢(六十五歳)未満の司祭は毎月、二回、ミッシオの会員のためにミサを捧げるといふものがあります。つまりそのミサ謝礼が年金基金に加算されるといふわけです。

アーヘン教区で始まったこの活動にどれぐらいの人々が参加して下さっているのか分かりませんが、ミサ奉納金を通して司祭の生活を支えて下さっているわけです。「ミッシオ」の精神はキリストこそ新しい世界を創造なさる方であることを確信して福音宣教に邁進している人々を支えることにある。それはキリストの要請であるし、信仰の証し、命の分かち合い、連帯精神の実践である、とそ

を与えて下さった末吉神父様、今日も夕陽の沈むあの美しい海岸を走っていらっしやるのでしようか。空港で飛び立つ瞬間まで大きく手を振り見送って下さったお姿、私たちの胸に深く刻み込まれております。心からありがとうございます。そして感謝……

のニュースレターの中で強調されています。ところで、二〇〇三年、五月、福音宣教省は「ミッシオ」のこの老齢司祭年金制度を閉鎖する旨を決定し、今後は各教区に独自で年金制度を創設し運営するよう要請しました。それは各教区が受け取るべき基金を正しい方法でそれぞれの教区に移管させるためでした。この要請を受けて鹿児島教区も老齢司祭年金の積み立てを始めました。その使途は引退司祭の生活費と医療費です。

「ミッシオ」からもう一年金受給年齢(六十五歳)未満の司祭は毎月、二回、ミッシオの会員のためにミサを捧げるといふものがあります。つまりそのミサ謝礼が年金基金に加算されるといふわけです。

信仰の歴史の古い長崎教区の人たちは、自分たちの意向もさることながら、司祭の生活は自分たちがみないといけない、という気持ちでミサ奉納金を準備します。それは迫害時代を耐

黙想会のご案内

テーマ 「自分、から始めよう、イエス」
指導 W・キップス神父(レデンプトール会)
日時 12月9日(土) 10時~10日(日) 16時
場所 マリア山荘(霧島市溝辺町麓)
申込み 西 Ⅷ〇九九五・一六三・一九四三
宮地 Ⅷ〇九九一・二六二・四〇二二



青年の広場へどうぞ 情報満載
鹿児島で頑張っている青年たちの姿が掲載されているHP(DE☆JAM)は携帯からでも訪問できます。